

# きびじつるの里 飼育員奮闘記

国から卵の移動に関する許可を受けて、きびじつるの里へ丹頂の卵を移動できるようになった。後楽園のカイとアイとの間に産まれた卵2個を譲り受ける。岡山県自然保護センターと岡山後楽園の研究員の立会いのもと有精卵であることを確認。移動用ふ卵器できびじつるの里へ運搬した。長径約10cm×短径約6.5cmのタンチョウの卵。昨年、県外の動物園から譲り受けた卵は、残念ながら無精卵でヒナ誕生には至らなかった。今度こそ…、自然と力が入る。

**5月31日** ピュルルルー、ピュルルルル…。ふ卵器の中の卵からヒナの鳴き声が聞こえてくる。コッコツ、コッコツ。2個のうち一つの卵で、はしうちが始まった。ヒナが卵の殻を内側から突き割ろうとする音だ。いよいよだ。くちばしが卵の殻から見えた。頑張れと心の中で叫んだ。自分の体が出られる大きさに上手に殻を割っていく。少しずつ殻から体を這い出す。新しい生命の誕生。午後0時45分、体重161g。我が子のように、ヒナの身体を確認。うん大丈夫だ。生まれたばかりのヒナの羽は濡れていて、寝たり起きたりしてまどろんでいる様子。親鳥と同じ温度、湿度に保たれていたふ卵器を1時間ごとに1度ずつゆつくりと外気温に近づけていった。この時点では、性別が不明であったが、とりあえず、アンチャン、

からは、赤外線ライトをあてて保温。午後7時30分、アンチャンは、その寝床を親鳥と思ひ込みタオルの中に抱かれて寝た。

**6月2日** 午前5時にアンチャンが目覚める。日没とともに寝て、日の出とともに起きるのは丹頂の習性。2時間ごとの食事の量もだんだんと増えてきた。順調だ。転びながらも走り出すほどの元気ぶり。そして、この日の午後5時40分、2つ目の卵が無事かえった。体重165g、とりあえずの名前はチビに。

**6月5日** 丹頂は強い足がないと大空へは飛べない。足腰の丈夫さが肝心だ。野生の丹頂の親鳥はヒナを連れて一日に10数キロ歩かせては、えさを与える。そして、この日アンチャンとチビは初めての歩行訓練。コスチュームを身に付けて親鳥に変身。自分の後を一生懸命付いてくるヒナには、いとおしさを覚える。この日は、よちよち歩きながら2kmも歩いた。初めてにしては上々だ。その後、日ごとにえさの量も増え、歩行距離も伸びていった。

**6月12日** おかしい。アンチャンの動きに違和感を覚える。順調に成長していたはずなのに、なぜだ。病気が？いや、悪いことばかり考えてしまう。歩行訓練中の記録ビデオをチェックしてみる。別に問題ないように見えるが…。うん？待てよ。コマ送り再生してみると、アンチャンの歩き方がおかしい。右脚の付け根に障害があるのか、右脚を踏み出して着地する位置が、右斜め前になっている。そのため右へ右へ歩いてしまいがちだ。脚障害だ。脚障害は、えさの魚類に含まれているアミノ酸が原因らしいとの説もあるが、詳しくは解



と呼ぶことにした。  
8時間後、丹頂のコスチュームを身にまとい、丹頂の頭の形をしたハンドパペット(「手人形」)でえさをやる。最初のえさを食べてくれるかどうかで成長の速さの度合いが違ってくる。最初のこの食いつきが肝心だ。首がまだ座っていないアンチャンは首を振り下ろすようにえさを目掛けてくる。パペットのくちばし



アンチャン誕生の瞬間。生命の誕生は神秘的です



ぶらさがったタオルの束が親鳥の羽のかわり。アンカ入りのパペットが顔をのぞけています



ヒナに会うときは必ずコスチューム着用。右手のパペットでえさをやります



矯正箱の端にえさを置いて往復訓練。アンチャンにとっても訓練の5日間でした



2羽のヒナもすっかり大きくなりました。生後100日後には47倍の大きさになるんです

明されていない。このまま放っておくと転ぶことが多くなり、歩けなくなり立てなくなる。立てなくなった鳥は、床ずれができやすく、最悪の場合死亡する。ショックだ。  
この日から、アンチャンだけ別の歩行訓練となった。木製の板を張り合わせて長さ10mほどのU字型の箱を作った。通称矯正箱。箱の幅は、ヒナの2本の脚幅。歩行時、アンチャンの右脚が外側に出るのを矯正する。この矯正箱をアンチャンは、一日中行ったり来たり。走らせないようにして、脚や関節の変形に注意しながら通常の歩行訓練に替えて行った。また、えさの種類も変えた。寝てもヒナがけがをする夢ばかりを見てうなされ続けた。そして、5日後…。特別訓練の甲斐あってか、なんとか支障のない歩き方になった。異常に気付くのがもう少し遅かったら。ゾツとした。  
**8月1日** アンチャンとチビが誕生して2か月。今ではすっかりツルらしくなった。容赦なく照りつける太陽。連日の猛暑の中でも歩行訓練は休日返上で毎日続いた。吹出す汗もかわいい我が子のため。1日12〜15kmの道のりは大人の人間でも大変なもの。飼育員の中には、お腹がへっこみベルトの穴が3つも少なくなった者もいた。それでもアンチャンとチビは一生懸命自分たちを親鳥と思い追いかけてくる。元気に育って欲しいそんな親鳥の思いが伝わっているのかもしれない。もう少しすれば、飛行訓練に入る。自分たちができることは、たかがしれているかもしれない。でも、ここきびじつるの里で生まれた最初のツルたち。何が何でも成功させたい。一人前のツルとして飛べるようにさせるぞ。